

はじめに

—身近な死、遠ざかる死、死の文化の多様性—

21世紀COE死生学の構築拠点リーダー 島 蘭 進

中世までの文化の特徴は、「死の向こう側」について明確な実在感をもっていたことだろう。フランスの歴史家、フィリップ・アリエスは『死を前にした人間』（1977年）でヨーロッパの古い時代の、また民衆文化的な死の意識のあり方を「飼いならされた死」とよんでいる。日本の民俗学者、柳田國男が『先祖の話』（1946年）で振り返ろうとしたのは、向こう側の死者とこちら側の生者がごく近くにもあることを当然と感じ続けて来た人々の形作ってきた文化の諸相だった。これらの文化研究者が注目したのは、死が来ると当然のようにそれを迎える準備を行う文化、また死者と隣り合って生きていることを受け入れている文化のあり方だ。そのような「死の近さ」は、中世まではありふれたものだったし、一部の地域の民俗文化の中では現代まで続いている。個にとっての死を重視し、死後の審判を恐れ、あの世の至福を期待する文化においても、異なる意味での死の身近さがあった。

2006年2月18日と19日の両日、東京大学文学部で行われた研究会議「死とその向こう側」は、まずはこのように「死の向こう側」を身近に感じる文化について、自殺や自死や殉教、悲惨な死、無念の死に向き合う流儀、また濃密な死者との交流の儀礼などを通して考えることを課題とした。加えて仏教やキリスト教等、個人の救済に思いをこらす思想の影響が、それにどう及んだかについて考察すること、また、現代においてもそうした感覚がまったくなくなってしまったわけではなく、根強く生き残っており、排除しきってしまうことのできないものであることについても考えようとした。死を覚悟したテロや死刑や安楽死、日本の心中や自殺や靖国問題などもこれらの論題と関わって連想された問題の一部である。

この問題にアプローチするには、さまざまなディシプリンを身につけた研究者の協力が必要であることは言うまでもない。日本とフランスの文化人類学や民俗学や歴史学、文学史研究や思想史研究や宗教史研究の専門家に加わ

っていただき、死生学の観点から議論をしていただくこととした。取り上げられる地域はアジアとヨーロッパに力点を置きつつも、世界各地の過去、現在のさまざまな事例を取り上げ比較しつつ考察を深めることを目指した。

研究会議は1つの公開シンポジウムと3つのワークショップから構成された。公開シンポジウムではフランス極東学院のFranciscus Verellen院長にアジアの、トゥルーズ人類学研究所Jean-Pierre Albert所長にヨーロッパの論題を取り上げていただき、基調講演をしていただき、日本側からのコメントを受けて討議を深めていただいた。そして3つのワークショップで、以下のようなテーマを設定して、討議が進められた。ワークショップA [進んで死を迎える] では、自ら死に向かって生きていくことを選ぶ人々について、またそのような生き方を準備する文化について論じられた。ワークショップB [非業の死を受け止める] では、戦争や災害、事故、若い者の自死・病死など、生き残った者にとって受け入れがたい死を、なお受け止め、納得しようとする文化の諸相が取り上げられた。ワークショップC [死者とともに生きる] では、もはやともに行為し、語り合うことができないかに思える死者と、なおともに行為し、語り合おうとする営みについて討議が行われた。

3つのテーマの考察を通じて、「死の向こう側」を身近に感じる人間のあり方、考え方についてさまざまな論点が提示され、理解が深められた。また、逆に死を遠ざけてきたと言われる現代人にとって「死の向こう側」がどこまで遠いものなのか、現代人は死を「飼いならす」ことができるものなのか、考え直すための基礎も何ほどか培われたことと思われる。2日間の密度の濃い議論を通して、私たちは死をめぐる過去の人類文化の豊かさに、また、均質化するかに見える現代世界でなお保たれている死の文化の多様性にあらためて目を見張ることとなった。

(しまぞの・すすむ 東京大学大学院人文社会系研究科教授)